医師同窓会 第1回市民公開講座開催

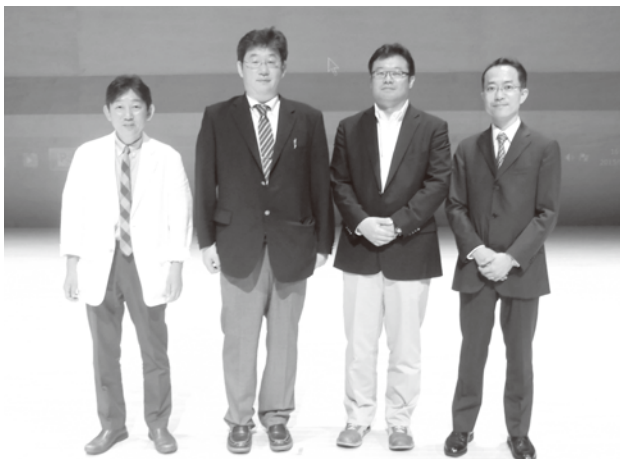
平成27年6月7日、聖光学院ラ・ムネ・ホールにて本校医師同窓会主催による第1回市民公開講座「『いのちの選択』～あなたの親が終末期を迎えたとき～」が2部構成で開催された。

第1部

第1部では、医療や介護の現場に携わる3名の本校OBが講師となり、それぞれの専門家としての視点や実体験を元にした3つの講演が行われた。

①まず、済生会横浜市南部病院救急センター長である豊田洋氏（22期）からは、「救急センターに搬送されてくる心肺停止患者の現況」というテーマで、救急医療の専門家としての立場から講演が行われた。

②次に、ホームケアクリニック横浜港南院長である足立大樹氏（25期）からは、「暮らしの場で最期を迎えるということ」というテーマで、在宅医療を専門に扱う医師としての立場から講演が行われた。


左から高見沢氏（14期）、豊田氏（22期）、足立氏（25期）、岸本氏（25期）

③最後に、株式会社ベネッセスタイルケア、サービス基盤本部本部長・介護事業担当の岸本譲太氏（25期）からは、「高齢者介護施設におけるターミナルケア」というテーマで、高齢者介護施設で看取りに携わる者の立場から講演が行われた。

第2部

第2部では、たかみざわ医院院長である高見沢重隆氏（14期）による司会進行のもと、第1部の講師3名に炭田英毅君、松田謙志君という現役生2名（いずれも高1、55期）が加わり、「これからの時代を支えていくのは僕らだ」というテーマでディスカッションが行われた。

ディスカッションでは、現役生2名も参加した「医療現場で考える10年後の未来プロジェクト」において横浜市内の中学生や高校生がまとめた「2025年問題」（団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になることにより生じる様々な問題）に関する意見を元に、同問題に関連する「介護」、「政策」、「倫理」等について議論が行われた。

講師3名からは、実際に医療や介護の現場に携わる者としての実体験から、医療現場におけるメンタルケアの難しさ、医療と介護の連携が進んでいないこと、在宅医療に関する法整備が欠けていること等について指摘や問題提起が行われた。これに対して、現役生もOB教員である沖田耕一先生（25期）のサポートのもと、前記プロジェクトで得た経験や実体験を元に考えた自らの意見を自分の言葉で述べた。自らも在宅医療に携わる高見沢氏の司会進行のもと、講師3名及び現役生2名の双方が活発な意見表明を行い、議論が深められた。

また、質疑応答では介護について悩みを抱える市民の方や看護師を目指す市民の方をはじめ多くの参加した市民の方から質問が寄せられ、貴重な意見交換が行われた。

＊　＊　＊

第1部・第2部共に充実した内容であり、「良い死を迎えるためにはどうすればいいのか」と考えさせる市民公開講座であった。参加された市民の方々からも大変好評であり、早くも第2回の開催を望む声が多く上がっていた。

シリーズ第21回

卒業生のオフィス紹介

伊藤建材㈱（横浜市）

住宅資材卸売
住宅リフォーム等

伊藤　元二（26期）

リファイン伊藤建材

横浜市保土ヶ谷区保土ヶ谷町１−49
☎0120(215)012
定休日　日曜日・祝日

26期の伊藤元二と申します。卒業して早26年、月日の流れが本当に早いと感じる年代になりました。在学当時、1学年上にいた兄と2人で稲荷坂を登り、当時は通り抜け可能だった米軍の根岸住宅の中を抜けて、汗をかきながら学校まで歩いて通っていた事をついこの間の事のように思い出します。

卒業後は、親しい同期の仲間内で会う事はありましたが、本格的に同窓会を行う契機は聖光学院50周年記念式典での再会です。

卒業以降初めて会った仲間と意気投合し、それからは2年に1度の割合で同窓会を行い、また月1回必ずゴルフに行くほど深い付き合いをしています。最近では、「聖光元気会」という、地元で商売を営む卒業生の会を工藤先生に作って頂き、同期に限らず、上下幅広い卒業生ともお付き合いをし、非常に刺激を受けております。

今回は、私が経営している「伊藤建材株式会社」について紹介させて頂きます。

創業は私の祖父が弟と一緒に富山から横浜に出てきて、製材業を現在も本社がある南区中村町で始めた事が発端だったと聞いており ます。当時は「伊藤製材」という社名でスタートし、時代と共に扱う材料の種類が増え、木材に限らずに住宅に関わる資材をトータルに扱っていく中で、現在の「伊藤建材株式会社」という商号になり、今年で63年目を迎えております。

商売の内容としては神奈川県下に3店舗を構え、住宅資材の卸問屋として主に販売店を通じて実際に建築を行う工務店・大工さんに資材を提供するという事を主たる業務として営んでまいりました。

しかし、販売先の高齢化や今後の人口減少・世帯数減少、さらには職人数減少の中でこの事業だけでは心許ないと考え、資材の販売だけに囚われない新たな事業を立ち上げている最中です。その一つが県外への初出店である仙台営業所の開設であり、業務内容も単なる資材販売ではなく、水廻りの設備関係の工事も受注しています。

また、同様に横浜でも資材の卸問屋の強みを生かして、リフォームや住宅新築工事といった施工分野に注力したワンストップサービスを提供する事業も始めております。特に、リフォームに関しては、ユーザー様との接点を保つために「リファイン伊藤建材」という看板を掲げ、狩場（保土ヶ谷区）にショールーム併設の店舗を構えております。

最近では、不動産業者からリノベーション工事を頼まれる事も多く、自社でも中古の不動産物件を扱うために宅建事務所の開設も近々行う予定です。

私は大学卒業後、一度「日産自動車」に就職し、家業を継ぐために戻ったのですが、戻って3年で先代である父が倒れ、実質そこから経営を引き継ぎ今年で15年目になります。

当初は、大企業と中小企業のギャップや昔から知っている人達とはいえ立場も変わり、人事の面でも非常に悩む事が多かったです。その中で同期との付き合いは、仕事から離れリフレッシュするうえでも非常に大切な時間でした。

また、今のように新しいステップを踏み出そうという時に、地元で活躍されている先輩との関わりも増え、その中で様々な助言や御教示を頂き、本当に聖光を卒業して良かったと実感している今日この頃です。

聖光出身である事に誇りを抱くと共に、学校の名に恥じぬようにこれからも日々努力して参りたいと思います。

各界で活躍する卒業生

美酒は人の和を醸成

出羽桜酒造 製造部

西田　彰人（28期）

西田彰人氏の略歴

平成９年、上智大学文学部卒業後、山形県天童市の「出羽桜酒造」（明治25年創業）に入社。同社製造部で、世界的にも評価の高い銘酒の醸造に携わっている

28期の西田彰人です。大学を卒業して以来約20年、山形県の出羽桜酒造という酒造メーカーで酒造りの仕事をしています。

居酒屋でのアルバイトがきっかけ

聖光在学中は全体的に目立たない生徒でした。大学在学中も同様でしたが、居酒屋でのアルバイトをきっかけに、美味しいお酒を造ってみたいと思うようになりました。

お客様から直接評価を頂ける自社ブランドがあることが魅力でしたし、また歴史ある業界ということも志望動機でした。

不安も大きかった入社直後

入社して1～2年は、酒造りができる喜びも大きかったですが、不安もまた大きかったです。ただこの期間があったからこそ、現在まで酒造りの仕事が勤まっているのだと思います。

他業種同様、酒造りも、一人の力で行うことはできません。酒造りは醸造責任者である杜氏（とうじ）の統率のもと、酒造りの各工程が従業員である蔵人（くらびと）により行われます。この酒造りの組織は、酒造りの期間である秋から春までの約半年間、土・日、正月、休みなく稼働していますので、一体感がすごく強い集団です。

他県出身の従業員は社内では私が初めてでしたので、時には苦労したりマイナス思考になったりしたこともありました。

励みになった上杉鷹山の言葉

しかし、マイナスのことは少し見方を変え、自分が前に進む原動力に変えることができました。

また、山形県米沢の第九代藩主上杉鷹山の言葉に「なせば成る　為さねば成らぬ　何事も　成らぬは人の　為さぬなりけり」という言葉があります。一つ一つ行っていけば必ず達成できるという、自分を信じることができる前向きな言葉で、励みにしました。

さらに、多くの人にも様々助けていただき、新しい環境にも順応することができました。

山形県は大学卒業まで、縁もゆかりもない所でしたが、現在は根っからの山形県人として、腰を据えて酒造りをしています。

「和醸良酒」

日本酒の業界には「和醸良酒（わじょうりょうしゅ）」という言葉が古くから伝わっています。杜氏を中心とした集団の和が美味しい酒を生むという意味ですが、美味しい酒は飲む人の和を醸成するという意味にも捉える事が出来る言葉です。

また、「和醸良酒」の「酒」の字を他の文字、例えば「仕事・人生」に置き換えても素晴らしい意味になる言葉だと思います。

身近なところから地道に頑張ることも必要

私が聖光を卒業した頃に比べると、難関大学に合格する生徒さんが多くなり、卒業生として大変誇らしく思っています。

一方で卒業生の中には、様々挫折を味わっている方も多くいらっしゃるでしょう。どこに向かって頑張ればよいか迷った時は、身近なところから地道に頑張ることも必要です。一つ一つの笑顔を大切にしていけば必ず自分の目標を達成できます。